‘COLUMN’０４年７月号

釣り銭の受け渡し

欧米でショッピングした時に、受け取る釣銭の手渡し方に違和感を覚えることがある。わが国と欧米、それぞれ永年の慣習に拠っているので、どちらが道理に叶っているとか、どっちが効率的か、ということは一概には言えない。しかし、日本人の目から見ると、欧米人の手渡し方はややまだるっこいと感ずることも事実である。それが彼らに言わせれば、自分たちの流儀こそ無駄がなく、間違いがないと自慢たらたらなのである。

確かに欧米流の手渡し方は日本人には馴れないが、後になって売り手と買い手が揉めることがなく合理的でもある。仮に560円の買い物に対して1,000円札で支払った場合、売り手がその商品を前に560円と一声かけ、その後10円コインをひとつずつ加えて、４枚で600円にする。買い手もこれに納得すると、今度は100円コインを数えながら、700円、800円、900円・・と1,000円まで４枚並べる。これをお互いが釣銭は、支払い額1,000円に対して、10円コイン４つと100円コイン４つと確認し、納得して支払いは終わる。日本のように前もって【(1,000円－560円）＝440円】なんて暗算はしないし、釣銭をもう一度検めるなんてことはもちろんしない。果たしてどちらが理に叶っていて普遍的だろうか。

（近藤　節夫）